

第二章

ヒアリング

NPO法人子どもネット八千代の「アートスタート」の取り組みより

子どもの体験に関わるアートコーディネーターが地域に必要なということが長らく言われ続け、実験的な取り組みからようやく社会化への兆しの一部が見え始め、そうした流れの中で、さらに対象を乳幼児(0歳1歳2歳3歳児)のリアル体験とした「アートスタート」の取り組みが地域のニーズから静かな広がりを見せています。

この背景としては、地域コミュニティの崩壊から『子育て支援』にかかわるプログラムのニーズ、『ブックスタート』という絵本と親子関係構築のためのニューウェーブ、そして乳幼児の過度のメディア接触による発達障害への警鐘と対を成したリアル関係の持つ重みへの再認識などが挙げられるでしょう。

しかし、地域現場での広がりを見るその一方で「アートスタート」を語るには、子どもの発達心理、親子関係、コミュニティの形成、さらに芸術文化といったいくつもの目に見えない要素が絡み合った取り組みであり、一言では言い切れない原理が「アートスタート」の普及はまだまだといった感じています。

さらにこれまで文化行政においては学齢期以降が主たる対象になっており、「アートスタート」の初出は2001年に公布された文化芸術振興基本法の基本方針への提案として子ども劇場全国センターから文化庁に提案された一文に「アート・スタート・プラン」として、優れた芸術文化作品の選出と鑑賞機会の拡充という趣旨で見ることができます(参照 p81)しかし、現在広がりを見せている「アートスタート」は鑑賞に留まらず、親子関係、二者関係からさらに広がりを持ったプレコミュニティ生成の要素と能動的なコミュニケーションを視野においている点によって「アート・スタート・プラン」とは一線を画するものとして展開しているかもしれません。

本調査研究においては、「アートスタート」におけるプログラム内容とその生成プロセスに注目し、「何」がこの広がりを後押しし、どこに向かおうとしているのかをお聞きしたいと思います。

稲垣 : この調査では、メディア接触の害悪を検証するのではなく、ちゃんと人間と人間が関わって遊んだり、体験したり、物語を共有したりすることにシフトできるような説得力のある素材を求めていきたいと考えています。現代は、お母さんたちに対しても、社会に対してもコミュニティのなかで体験することがどれだけ効果的で必要なかを理解してもらうことが必要です。でも、そうした豊かな文化体験をして育った子どもがどれだけ豊かになったのかということは証明することは難しくはあるのですが、特に今の対象となっている0歳から3歳までの生の体験はものすごく重要だと考えられ、子ども劇場全国センターでも、乳幼児とその親を対象としたエリックカールの「はらぺこあおむし」や「ドリーム・オブ・チャイルド」といった優れた海外作品の提供に対して、高い評価を得ています。

子ども劇場では乳幼児とその親を対象にしたサークル活動やワークショップが意識的に動き始めた時期が今から5~6年前だったと思います。子どもネット八千代では、いつ頃からどのような活動として始まったのでしょうか？

棚田 : 子どもネット八千代では、それまで会員さんのサークル活動だったのが、1999年から主に3~4歳児の幼児を対象に親子の表現あそび「ぴょんぴょん」を始めました。会員さんは4歳からなんですけど兄弟がいるといったことからだったと思います。その下地があって、

2001年の清川輝基氏のメディア接触の危険と文化体験の講演を受けて、乳幼児のメディア接触に課題をおいた文化芸術体験を組み込んだ1～2歳児を対象とした「ミニぴょんぴょん」を2003年より実施しました。同年子ども劇場千葉県センターの「子育て応援シアター2003」に参加しています。

稲垣：その当時のニーズとしてはどのようなことを感じて、どのようプログラムを実施されたのですか？

棚田：2003年・2004年は、団塊ジュニアの親が居場所を求めるニーズが高かったですね。まだ子育て支援の場面も少なく、実際にお医者さんにかかっているお母さんもいたり、子育てをする母親の厳しさを感じられました。2005年度に実施したのは次のような2タイプのプログラムです。

心なごむ時間(とき) 安心できる場所(とこ)
乳幼児とお母さんのワークショップ <ミニぴよんぴよん>

■事業概要

近年氾濫する情報に振り回され自らの子育てに不安を感じながら、孤独な子育てをしている若い親が過剰な責任とストレスを背負い込んでいるのが現状です。親子がゆったりと安心して楽しむ場所と子育てへのまなざしが温かい人垣をつくっていくために、乳幼児(1歳~2歳)とその親を対象に子育て応援事業「ミニぴよんぴよん」を開催しました。

■<目的>

- ① 優れた舞台芸術作品を鑑賞する機会をつくり『アートスタート』のきっかけになることを目的とする。
- ② 肉声のもつ美しさや体を動かす表現あそびを通して、ゆったりと安心して親子のふれあいを体験する機会をつくり、親同士が気楽に交流できる場所を提供する。
- ③ 行政や他団体とネットワークを組み、子育て支援の輪を地域社会に広げる。

■事業内容

【リトミックコース】身体を動かしながら音楽をつかんで表現

開催期間:2005年6月~7月の全4回

講師:浅見このみ先生

会 場:八千代市緑が丘公民館 集会ホール
対象年齢:1歳~2歳の親子
参加人数:24組
参 加 費:親子で7,500円



<第2回茶話会より>
時間がたつのを忘れる程、盛り上がるお母さん同士のおしゃべりタイム。おしゃべりの輪に加わったこのみ先生が「子どもの顔を見て、たくさん歌ってあげてください。下手だからとか、忘れてしまったなんて言わないで自分で作ったっていいのですよ。」とささやくようにその場で即興で歌うと、にぎやかだった子どもたちは、一瞬にこのみ先生に釘づけ。「あの時の子どもたちのキラキラした目は、一生忘れないでしょう」とこのみ先生も大感激。そんな我が子を見つめるお母さんたちの目も、とても輝いていた。

月	日 時	内 容
6月	7日(火) 10:30~11:30	リトミック
	21日(火) 10:30~11:30	茶話会
7月	5日(火) 10:30~11:30	リトミック
	19日(火) 10:30~11:30	リトミック



【シアターコース】肉声のもつ美しさや身体を動かす喜びを親子で感じて

開催期間：2005年9月～11月の全6回ずつ3会場

ワークショップ4回：手あそび、わらべうた、スキンシップ体操、3B体操、茶話会など

人形劇鑑賞：「うみはぶくぶく」くわえ・ぱぺっとステージ

文化体験講座：八千代市「文化芸術による創造のまち支援事業」共催 講演とコンサート

対象年齢：1歳～2歳の親子

参加人数：51組（3会場）

参加費：親子で7,000円

〔水曜日コース〕

①会場：八千代市文化伝承館

月	日時	内容
9月	7日(水) 10:00~12:00	ワークショップ
	21日(水) 10:00~12:00	茶話会
10月	12日(水) 10:00~12:00	ワークショップ
	26日(水) 10:00~12:00	ワークショップ

講師：松戸照子さん



すべて手作りの自作品を使った松戸照子さんワークは、温かでゆったりとした空間を作り出した。



〔木曜日コース〕

②会場：八千代市緑が丘公民館

月	日時	内容
9月	8日(木) 10:00~12:00	ワークショップ
	22日(木) 10:00~12:00	茶話会
10月	13日(木) 10:00~12:00	ワークショップ
	27日(木) 10:00~12:00	ワークショップ

講師：田中明子さん



広い会場の中、新聞をいっぱいちぎって子どもたちが嬉しそうに埋もれたり、巨大バルーンで遊んだり、ダイナミックな田中明子さんのワークは、飽きさせない盛りだくさんのプログラムだった。



〔金曜日コース〕

③会場：八千代台近隣公園小体育館

月	日時	内容
9月	9日(金) 10:00~12:00	3B体操
	30日(金) 10:00~12:00	3B体操
10月	14日(金) 10:00~12:00	茶話会
	28日(金) 10:00~12:00	3B体操

講師：長谷川千恵美さん



子育てで忙しいお母さんたちが日常できない体操で、おもいっきり体を動かした。3B体操で音楽に合わせて体を動かす楽しさを味わい、近隣公園での外遊びや昼食は、お母さん同士のコミュニケーションづくりに最適な環境であった。



[人形劇鑑賞] 乳幼児の心と体にやさしく語りかける生の舞台との出会い
うみはぶくぶく くわえ・ぱぺっとステージ

会 場:八千代市ふれあいプラザ
対象年齢:1歳~2歳の親子
参加人数:137名
参 加 費: 2,800 円(親子ペア一般)
1,500 円(3 歳から一般)



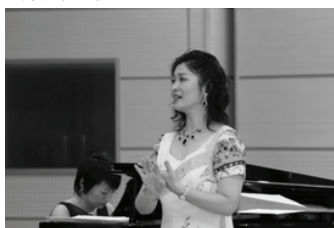
月	日 時	内 容
11 月	15 日(火) 開場 11:15 開演 11:30 終演 12:20	観劇会 全コース

会場は大勢の親子でにぎわった。「リラックスしてお母さんが楽しんでください。お子さんが大きくなっても、記憶に残る場面がひとつでもあるといいですね」とつげくわえさんの言葉。色彩豊かな劇中にも、お母さんたちに向けた応援メッセージがちりばめられ、アートスタート(初めての文化的な体験)として素晴らしい作品を親子で鑑賞できた。

[文化体験講座] 美しい心を育てるために
八千代市「文化芸術による創造のまち」支援事業 共催

会 場:八千代市緑が丘公民館
対 象:0 歳から未就学児を持つ親
妊婦さん
参加人数:74 名
参 加 費:500 円

講師:飯塚千尋さん



講師:岩撫智子さん



月	日 時	内 容
11 月	8 日(火) 10:30 ~11:30	講演 コンサート
	18 日(金) 10:30 ~11:30	
	22 日(火) 10:30 ~11:30	



共催事業として、市内在住の芸術家と手をつなぎ、子育てのための文化活動の意義と必要性を再確認し、互いの活動を豊かにすることができた。実行委員会を開き、開催に向けて話し合いを進めた。子育てと音楽の関わりをテーマに、市内在住の声楽家飯塚千尋さんによる講演と音楽を聞き、文化に触れ学んだ。家庭の中の文化伝承の大切さ、声と心の関係に気付かせ、子育てのヒントとして提供できた。

- 棚田 : 「リトミックコース」は、身体を動かしながら音楽をつかんで表現するというワークショップで、全4回のコース、始まる前にスタッフは浅見先生のワークショップを受けて親子を迎え入れます。スタッフも表現することで、表情が優しく、笑顔で親子を迎えることができるんですね。
- 稲垣 : 「シアターコース」は、複合的なコースですね。
- 棚田 : そうです。ワークショップが4回あって、手あそび、わらべうた、スキンシップ体操、3B体操、茶話会、それから人形劇の鑑賞が「うみはぷくぷく」という「くわえ・ぱぺっとステージ」、次に、文化体験講座として講演とコンサートに参加します。肉声のもつ美しさや身体を動かす喜びを親子で感じてもらうというプログラムです。
- 稲垣 : とても充実した内容ですね。これだけあって7千円というのは格安という気もしますが。
お母さん方はどのような動機で参加してこられるのでしょうか。また、ストレートに伺いますが、わずか4回のリトミックのコースでどのような成果があるのでしょうか？
- 棚田 : 参加費も他の子育て支援のプログラムに比べたら高いですし、私たちのプログラムに参加されるお母さん方は、とても意識の高い方が多いんですね。
例えば、1時間のコースの後にお昼の時間があるのでお弁当を持ってきてもらいますが、多分朝早く大変でしょうから、「簡単なおにぎりだけでもいいですよ」といっても、しっかりおかずも作ってこられる。先日、子育て支援で行政訪問をした時に、お母さんの中には、子どもにお弁当を作らなかつたりコンビニのお弁当ですませてしまう人が増えているという話を聞いて、文化・芸術に触れる「アートスタート」を掲げたワークショップには、そういう層の母さん方が多いんだなと気づきました。
あと、リトミックを子どもが習うには何歳からがいいのでしょうか？ という質問をされる方がいたり、教育熱心というんでしょうか。
- 稲垣 : 早期教育のカルチャーになりかねない危険もあるということですか？
- 棚田 : そうですね。子どもネットは、「お母さんだけ」ではなく、「親子」でということを大事にしています。そして、子どもネットの子育て支援というのは、文化的な活動を通したものです。ですので、参加費も高くなってしまいうんですが。そういうこともあって、参加される方は文化的な意識が高く、ほかのお子さんと比較する意識も強かつたり、できないというのでがっかりされたりもします。ですから、そうじゃないんだよ、できなくてもいいんだよって、安心させてあげるところから始まりますね。
先生がいてねいに毎回、うたう楽しさ、表現の豊かさを伝えてくれて、子どもとコミュニケーションすること、またお母さん自身が表現することの楽しさや、豊かさを感じてもらうことを目指しています。
- 稲垣 : 子どもたちは、1歳、2歳ということですが、リトミックに参加するんですか？
- 棚田 : いろんな子どもがいますよね。1歳から2歳といっても成長の変化はとて大きくて、一人で楽しめてしまう子どももいるし、全然関係ないことをして遊んでいる子どももいるし、お母さんから離れられない子どももいますしね。ですから私たちスタッフが子どもたちをフォローしながら、親子で一緒に空間にはいるけど、まずお母さんが感じて、楽しめることを目的にしています。親子がみんな楽しんでる機会は少ないですから、子どもが離れられれば、お母さんが覚えて帰って子どもと楽しめるようにと、スタッフが一緒になって場を作っていきます。
- 稲垣 : なるほど！ それこそ教育熱心なママになってしまうかもしれないお母さん方に、アートスタートに参加することで、そうじゃなくてもっと人間的で豊かな、

楽しいことだということを感じてもらおうチャンスを作っているということですね。

棚田 : そうです。ただ2005年には定員オーバーでキャンセル待ちの方もいたのですが、2006年になると、八千代市でもずいぶんと子育て支援の場が増えて、定員割れになっています。また、完全保育の事業には高いニーズがあるのですが、そこは見直しを考えています。お母さん方がホッとできることはいいのですが、やはり私たちは親子が一緒に参加できることを大事にしたいと考えています。それと子育て支援が普及して、低価格な行政の親子教室や自主サークルは人気が高くなっているということもあります。

稲垣 : お母さん方は、リトミックはある程度想像できるとしても、シアターコースのプログラム内容を理解して参加されているのですか？

棚田 : たぶんわかってはいないと思います。感想にも現れますが、ワークショップで親子で遊んだり、自分が遊んで楽しいということを感じ、人形劇をはじめて観てこんなに楽しいってわかる。そして、最後に文化体験講座とミニコンサートで、文化・芸術って、こういうことなんだということを感じてもらうような組み立てになっています。

稲垣 : 思い出しました。子どもが4歳のときに初めてプークの人形劇を観にいったこんなに豊かで楽しいものなんだって……、会場に入るその瞬間まで幼児が見る人形劇なんてテレビでやっている子ども騙しだと思っていまませんでした。

棚田 : 私もですよ。それと、私たちスタッフのスキルとして、お母さん方をつなげていく方法を勉強しながら、出会いのコーディネートを意識的にしています。参加の動機でもお友だちがほしいということも書いてあるのですが、そうかといって自分から積極的にコミュニケーションをとるのも難しいんですね。ですから、できるだけ住まいが近くの人同士を隣り合わせにしてあげたり、お母さんとおしゃべりの中から得たいろんな情報で、きっかけをつくるようにしています。

稲垣 : 参加の呼びかけは「アートスタート」ということを前面には見せていないのですか？

棚田 : いいえ、「アートスタート」です。そして4つのセールスポイントでお誘いしています。これがそのチラシです。

【2006年度ミニびよんびよんチラシ】

稲垣 : 「親子の居場所」と「アートスタート」と「参加型」と「研修を受けたスタッフがケア」ということですね。そういう子育て支援としての視点で茶話会が一回組まれているのかと思いますが、他に交流するための時間というのはないんですか？

棚田 : シアターのプログラムではお昼を一緒に食べるんです。食事をするといい効果があって、おしゃべりが楽しくてなかなか席を立てないお母さん方もいて、いい時間になっていますね。今は一会場の参加者は十数組で関係が作りやすい人数なんですけど、年々ほかのお母さん方の居場所も増えてきて、参加した人の満足度はとても高いので



すが、募集が厳しくなっているという面もあります。

稲垣 : よその支援の場所では、こうしたアートスタートの視点を持っているところがあるのですか？

棚田 : アートスタートという視点で行っているのは、市内では私たちのところだけです。千葉県内では11の子ども劇場のネットワークと連携(注1)で実施しています。そして、そういう体験ができる場所としての自負もあります。

参加者からの評価としては、

「リトミックコース」では、「とても楽しかったです。子どもと一緒に参加できる場があるってすばらしいですね！！」とか、「うちの子は、少し他の子と違う反応をしてピアノを触ったり、皆の前に一人だけ飛び出したりして困っていたところ、スタッフの方に『本人の楽しむようにさせていいのよ』と言ってもらって安心して安心しました」、「お友達とも毎回楽しく会うことができ、子ども以上に母が楽しめました」「母子ともに、とても楽しく参加できました。また定期的に参加することにより、子どもが人や場に慣れ成長することができた」、「日頃、お家の中で、手遊びをしたりはしますが、音楽にふれることが、あまりありませんでした。この教室にきて、ピアノに合わせてうたったり、踊ったりすると、とても楽しく、すばらしいことを感じました。日頃から音楽を聴いたり、歌ってあげたり、これからしていけたらと思っています。うさぎやロウソクなどハンカチを使って遊ぶことも覚えてよかったです」といった感じで、私たちが考えている音楽と子育て支援の組み合わせが功を奏していると感じられます。

また、「シアターコース」では、「スタッフの方にはお世話になりました。母親が楽に過ごせるよう様々な配慮をしてくださり、心から感謝しています。ワークショップでは二人で過ごしている時には、見られない子どもの表情が見ることができました」、「今回3B体操に参加させていただきました。子どもがまだ小さいので「体操できるかな？」と聞いていたのですが、大勢で音楽に合わせて動くことはすごく楽しかったです。スタッフの方々が子どもをみていて下さるので、とても安心できました」とか、「ワークショップに初めて参加しましたが、各回手作りで感心しました。講師の田中さんは、元気で明るく毎回違った内容だったので、子どもも喜んでいました。アットホームな感じでとても良かったので、オススメなサークルだと思います」といったもの、また、子どもの評価としても「子どもは一回行ってから気に入ったようで、次から行くのを楽しみにしていました。スタッフの方も優しく、このような雰囲気が日常生活の中にあって、地域で子育てできると、子育てしやすいなと思いました」という感じですね。

あと人形劇鑑賞では、「うみはぷくぷく」を観て、子どもの様子がわかるものとしては、「とても元気の出るお話でした。くらげさんがかわいかったです。息子は最後に、たこさんとカニさんにバイバイできたと喜んでました」とか、「今回初めて、人形劇を観ましたが、会場の雰囲気にも驚くことなく、とても楽しく観られました。現在、作ることへの興味が大きく、登場した魚さんたちを観て、家に帰って作ってみたいと言っていました。とてもきれいで親子で楽しく久しぶりにほのぼのした気持ちになりました」という、アートスタートの真髄といえますか、ものすごく心を元気にして創造的にしていくという面も観られます。

また、おかあさんにたいしては“子どもは親の思ったとおりにならないのよねえ！”っていう一言！とっても良かった。くらげママの心境というか、それくらいの肩の力の抜き加減で、子どもに接することができたら、イライラしたり、おこったりしないですむのかもしれないね」や「まだ小さいので、途中退場かと心配していましたが、最後まで楽しめました。「がんばりすぎないように」「子どもは思う通りにはならない」など心にとめておきたいメッセージでした」、というか

んじですね。

稲垣：劇中のメッセージがピタッときている様子がわかりますね。この人形劇は1時間ということですが、長いということはないのですか？

棚田：そうですね、少し長いかもしれませんが、今年は、同じつげさんですが、2005年の人形劇からさらにピタッときた「かくれんぼしているのだあれ」という作品でとても評価も高かったんです。

稲垣：作品にもよるといことですね。棚田さんのお話を伺って理屈ではなく、乳幼児の時期に、親子で「アートスタート」を体験する魅力もあるし、実際に子どもが育っていく上で不可欠な要素として、お母さん自身も変わっていく、多くの様々な人間と関わっていくチャンスとして、親と子と他者が物語を共有し、一緒に体験する仕掛けとして、こうした親と子の手の届くところに『アートスタート』を準備していく必要性がよくわかりました。今日は、貴重なお話を長時間にわたり、どうもありがとうございました。

談 棚田 純子(子どもネット八千代)

聞き手 稲垣 秀一

(子どもNPO・子ども劇場全国センター)



(注1)

■NPO法人子どもネット八千代の活動は、千葉県内の子ども劇場のネットワークと連携で行われている。

「子育て応援シアター2006」 県内11団体で開催

舞台鑑賞19作品 ワークショップ175回 延べ参加予定数6,231人(2006年4月時点)

【参加・実施団体】

(特) 船橋子ども劇場 / (特) 子どもネット八千代 / 鎌ヶ谷おやこ劇場 / (特) いんざい子ども劇場 / (特) 千葉中央おやこ劇場 / 千葉北おやこ・みるあそぶ会 / 千葉西おやこ劇場 / (特) 子どもプラザ成田 / (特) 四街道こどもネットワーク / (特) 子どもるーぶ袖ヶ浦 / (特) 子ども劇場千葉県センター

(参考資料)

乳幼児を対象とした文化芸術体験の現在 ～アートスタートの可能性～ リサーチシート	
(特)子どもネット八千代	
回答者 : 子育て支援部 棚田純子	
① はじめたきっかけ	1999年幼児対象に親子の表現あそび「びよんびよん」実施。2001年清川輝基氏講演会后、乳幼児のメディア接触到課題をおき文化芸術体験を組み込んだ「ミニびよんびよん」を2003年より実施。同年子ども劇場千葉県センター「子育て応援シアター2003」に参加。
② 地域のニーズ	孤独な子育てをしている親が安心して気楽に交流できる居場所づくり
③ 親子のニーズ	(顧客ニーズ) 2003年・2004年は、団塊ジュニアの親が居場所を求めニーズが高かった。2006年は定員割れとなったが、完全保育の事業には高いニーズがあった。低価格な行政の親子教室や自主サークルは人気が高い。
④ 実施して発見したこと	ワークショップでやった手あそびや歌、工作などを家へ帰ってから親子で遊んだことがアンケートから分かり、文化的な体験が親子のコミュニケーションを増やし、子育て支援に十分につなげることができること。
④-a 親子関係について	アートスタートとして年齢にぴったりの作品を提供し、子どもが集中して観ている姿にお母さんは幸せな気持ちで満足しているのが実感できた。
④-b 地域	行政や地域での子育て支援が急激に広がりを見せているが、福祉的な要素を含んだ支援が多い。
④-c 集団	親が我が子の反応に敏感で上手にできることを重視し、集団になると顕著に現れる。
④ コミュニティの変化	連携を図ることが困難であったが、行政との関わりの中から市内子育てネットワークづくりの兆しがみえた。
⑨ 今後の見通し	文化芸術体験を通した子育て支援を実施しているのは他になく、特性を活かした事業を継続する。
⑩ 課題	文化芸術体験が乳幼児期の子育てに必要なことを啓蒙する。
⑪ 開始年	2003年5月
⑫ 作品・プログラム名	みんなの人形劇場、うみはぷくぷく、かくれんぼしてるのだあれ、音楽鑑賞(子育てのための文化体験)、ワークショップ、親子体操、リトミック
⑬ 劇団名など(提供者)	人形劇団ののはな、くわえ・ぱぺっとステージ、浅見このみ、佐野裕子、八千代市在住音楽家
⑭ 一回の参加者数(組)	ワークショップ20組～25組×3～4会場、舞台鑑賞70組
⑮ 対象年齢	びよんびよん(3歳～4歳) ミニびよんびよん(1歳～2歳)
⑯ 意図していること	ゆったりと安心して親子のふれあう機会をつくり、親同士が気楽に交流できる時間と場所を作ること。 集団の中で人とかかわることでコミュニケーション力を培う。

第三章

鳥取県 アートスタートの提言

特定非営利活動法人こども未来ネットワークの活動より

アートスタートの取り組みから、政策提言へ

特定非営利活動法人こども未来ネットワーク（鳥取） 楠本知恵美

乳幼児に向けてアートスタートを始めたのは平成15年からですが、4年続けてきて徐々に地域に定着してきていることを実感しています。

私たちが「乳幼児と生の舞台とのであい」「アートスタート」を始めた背景には、変わっていく子育て環境への不安がありました。当時、私たちは「乳幼児とメディア接触」に関する調査（平成14年、県内113世帯アンケート実施）を始めていたのですが、核家族化が進む中、子どもとの関係に行き詰まり、子どもとの関わり方が分からない母親が多くいること、子どもたちの多くが赤ちゃん期からテレビ・ビデオといった電子映像メディアに過剰に触れていること、そして極端に人との関わりが少ないことなどの現状を知りました。

そして、こうした状況は、その後の子育てをより一層困難にさせるであろうことも予測できましたし、人格形成の土台をつくる大切な時期の過ごし方としては誤っているのではないかと思えました。

このような状況を踏まえて、乳幼児期にこそ必要な「人は人との関わりの中で育つ」ということを子育て中の親たちに体験の中で理解してもらいたいと、親子で心を通わせ、喜びを共に味わうことのできる乳幼児と親のための生の舞台芸術を鑑賞する空間をつくり出す作業を始めたのです。現在は鳥取県を東部、中部、西部の3ヶ所に分け、計6ステージおこなっています。

この取り組みを通じて子育て支援センター、ファミリーサポートセンターなど、地域の子育て支援団体とのネットワークが築けました。

4年間、「アートスタート」として0～3才のための出会いの場づくり、空間づくりを押し進めてきて今感じていることは、この取り組みは新たな子育て支援となりうるということです。

そこで、2006年11月に鳥取県に「アートスタート」の「政策提言」を提出しました。

しかし、まだまだ県民に広く認知されてはいませんし、赤ちゃんが舞台鑑賞するなどありえないといった認識をしている人も多いのが現状です。そうした中で「アートスタート」を、実際に体験した人、関わった人でなければ必要性も事業の素晴らしさも理解できないだろうと思いますので、理解者を増やし、鳥取県ならではの子育て支援として県内外に広くアピールする必要があると考えています。

アートスタート事業は今後も続けたいと思っていますが、財政基盤が確立できていません。現在は鳥取県のアートスタート支援モデル事業としておこない、来年度も鳥取県は予算化しているのですが、私たちが申請できるかどうかまだ分かっていません。私たちとしては県の財政支援があるなしにかかわらず19年度は実施の予定です。

1. これまで実施した作品と団体

- 平成15年 「どうぞのいす」(劇団 円)
- 平成16年 「はじめてのお芝居」(人形劇団のはな)
- 平成17年 「ぴーかぶー」(劇団風の子九州)
- 平成18年 「ふわふわやま」(山の音楽舎)

2. 参加者

親子30組～50組(作品により) 17年からは0才～3才までとした。

鳥取県への政策提言として

アートスタートの確立と充実を目指して
背景及び現状の問題点
支援モデル事業についての成果と問題点
紹介事業成果と問題点
政策の概要及び目的
終わりに

1. アートスタートの確立と充実を目指して

私たち、特定非営利活動法人こども未来ネットワークは、「県内全ての子どもたちが、子ども時代を生き生きと心豊かに過ごせる環境づくり」を目指し、平成14年より活動をはじめました。設立以来一貫して、“本物とのであい”をキーワードに、現代社会が見失いがちな人との関わりを大切にするいくつかの運動を提案して参りました。

「メディアスタート」 子どもとメディアとの関係を見つめ直そうという呼びかけ。

「トイスタート」 子どもの成長発達にふさわしいおもちゃ選びについての呼びかけ。

「アートスタート」 子どもの五感を刺激し、心の成長を手助けする文化・芸術との出会いをつくり出そうという呼びかけ。

これらは、すでに全国各地の自治体取り組み、成果をあげている「ブックスタート」と同じように、今後地域に必要とされる事業となることでしょう。それは、「子ども・親子」の視点に立った「子育て支援」としての側面と、子どもとの暮らしを見つめ直し、自ら親が、暮らしの中で学び育つ姿勢を取り戻す機会「家庭教育」、更には、文化体験を通じ心豊かな人生への架け橋となる「文化育成」の分野において等、さまざまな可能性を秘めているからに他なりません。

私たちが先駆的に取り組んできたこれらの事業は、「人との関わりを心と身体で味わう」といういたってシンプルなものですが、全ての子ども(親子)たちがこれらを体験できうる環境をつくれたなら、現在社会が抱えるさまざまな問題の根底にある「コミュニケーション能力」を回復へと導く手助けとなる筈です。

そこで今回、それを最も効果的に行える事業として「アートスタート」を取り上げ、実際の事業の成果に裏付けられた私たちなりの「政策提言」としてここに提案いたします。「鳥取県内、すべての子どもたちに、文化芸術作品との出会いを！」それが私たちの望む広い意味での「アートスタート」ですが、中でも「0・1・2・3才」を対象とした「乳幼児のアートスタート」の早期確立と充実を重点目標とします。それは、現代社会が失ってしまったものを取り戻す作業、人と人とを結び直す“人とのであい”を再生する事業、に他ならないのです。

●背景及び現状の問題点

我が県では、国民文化祭(平成14年開催)を経て、県民が広く文化に親しむための環境整備がすすめられてきました。子どもの文化芸術体験活動においては、鑑賞機会の充実、教育現場へのアウトリーチ活動(とつりの芸術宅配便事業等)なども行なわれています。「文化立県」と呼ぶにふさわしいと多くの県民は感じていることでしょう。けれど、その中であって、乳幼児とその親に対する取り組みは、十分なものとは言えません。

平成15年春、私たちは、“2才から4才の子どものためのお芝居”(「どうぞのいす」出演/演劇集団「円」県内3公演)に初めて取り組みました。それまで2才、3才の子どもたちは、4才以上の幼児を対象とした作品(人形劇、舞台劇など)に参加する親子の同伴者でしかなく、兄弟のない小さな子どもたちには同伴者としての鑑賞の機会すらない、という現状でした。と同時に、2、3才の子どもが舞台を観るなどということ自体、一般的には考えもされなかったことでした。けれど私たちは、2才児は2才児なりに、3才児は3才児なりに生の舞台を楽しめるという事実を、長年の親子での鑑賞体験により得ていました。「ブックスタート」を通じて、赤ちゃんが「絵本」を楽しむ様子が理解されたように、誰もが気づかなかった真実を、広く世の中に知らしめたい。2才、3才の子どもと親のための「アートスタート」はこうして始まりました。その後、回を重ね、参加する親子の笑顔、喜びの声に支えられてその対象を0・1・2・3才へと広げていくことになったのです。

そもそも、私たちが“乳幼児と生の舞台とのあい”「アートスタート」をはじめた背景には、変わっていく子育て環境への不安がありました。「乳幼児とメディア接触」に関する調査(平成14年、県内113世帯アンケート実施)を始めていた私達は、核家族化が進む中、子どもとの関係に行き詰まり、子どもとの関わり方が分からない母親が多くいること、子どもたちは赤ちゃん期から、テレビ・ビデオ、といった電子映像メディアに過剰に触れていること、そして極端に人との関わりが少ないことなどの現状を知りました。そしてそれらがその後の子育てをより一層困難にさせることも予測できました。人格形成の土台をつくる大切な時期の過ごし方を誤っているのではないかと思えるような現状に気づき、乳幼児期にこそ必要な「人との関わりの中で人は育つ」というメッセージを子育て中の親たちに体験の中で理解してもらうために、親子で心を通わせ、喜びを共に味わうことのできる「乳幼児と親のための生の舞台鑑賞」の空間をつくり出す作業を始めたのです。「アート」を通じた子育て支援、「アートスタート」の限らない可能性を追求しながら。

小さなNPOの先駆的な取り組みに対し、「文化」を重んじる施策のひとつとして、全国でも例を見ない「アートスタート支援事業補助金」(平成15年度)が設けられました。自治体の計らいに私たちは勇気づけられ、県内全域で「アートスタート」の機会をつくり出そうと努力を重ねて参りました。そして今では、「アートスタートの先進県」を自負するまでに至ったのです。

鳥取県の補助事業として通算4年の事業実施を重ね、成果はもちろんのこと、いくつかの問題点も明らかになりました。そこで、主な成果と問題点を次のように整理しました。

2. アートスタート支援モデル事業についての成果と問題点

●参加者(親子)に見られる成果

文化・芸術を、日常の中でより身近なものと感じるようになった。

0才、1才、2才、3才、それぞれの年齢に応じた舞台の楽しみ方があり、幼い子どもであっても、観客と

して楽しむことができると分かった。

子どもの喜ぶ姿、さまざまな反応を見ることが、その後の育児に役立った。

体験することが何より大切であると実感できた。

●実施者として感じた成果

3才までと4才以上、乳幼児を分けて考える必要があると確信できた。

0～3才のための出会いの場づくり、空間づくりを「アートスタート」として押し進めることは新たな子育て支援となりうる、と実感した。

地域に出掛けていくことにより、それぞれの地域の子育ての状況が分かった。

子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、などの地域の子育て支援の団体とネットワークが築けた。

それぞれの開催地域に「アートスタートボランティア」を育成し、支援を受ける人、サポートを行なう人、それぞれを地域の中でつなぐことができた。

文化芸術に親しむ基盤づくりに貢献できた。

「アートスタート」という言葉やめざすものについて、理解され始めた。

●問題点

アートスタート作品に関する情報収集から作品決定まで時間を要する。更に、上演団体との日程調整等は前年度中にほぼ終えなければならず、補助事業募集の時期(年度はじめ)から取り組むことは非常に困難である。

アートスタートの作品選び、鑑賞環境づくりにはそれなりの能力を要する。実施者を広く公募する場合には、提供する作品、並びに取り組み方など事業全般について応募者選考の基準を設ける必要があり、また、選考する側にもそれなりの力量が必要である。

子どもの発達から考えると、0～3才と4才以上では、作品の内容、構成、手法は異なったものとなる。「アートスタート」の定義が定まっていなかったため、「アートスタート」の目的、対象にふさわしい実施になり得ていない。

「アートスタート」の確立を着実にしていくためには、継続的に取り組むことが重要だと考える。0～3才の子どもの対象とした、本来の意味の「アートスタート」の実施は、1会場あたり30組程度のきめ細やかな対応が必要であるが、その分経費面でも一人当りの割り合いが高くなる。経費相当の一部を受益者負担とすることで何とか実施できているが、経費負担がある限り、参加を踏み止まる親子も実際にある。

「アートスタート」の開催情報の周知が不十分で、実際の参加者もごく一部の親子に限られている。0～3才までの間に、誰もが一度は「アートスタート」を体験できるように進めていかねばならない。

「アートスタート」は県民に広く認知されていない。赤ちゃんが舞台鑑賞するなどありえないと誤った認識をしている人も多い。「アートスタート」を、実際に体験した人、関わった人でなければ必要性も事業の素晴らしさも理解できないだろうが、そうした理解者を増やし、鳥取県ならではの子育て支援として、県内外に広くアピールする必要がある。

3. アートスタート紹介事業についての成果と問題点

成 果

保育所・幼稚園、公民館、など、地域の身近なところで、小さくともキラリと光る“ホンモノ体験”実施

のお手伝いができた。(実績／平成15年度 16年度17年度)出演者と主催者の間での日程調整、実施に関するさまざまな準備、確認等を責任をもって行ない、「子どもと生の舞台体験」について、その必要性や、楽しみ方をサポートするなど、子どものための「アートプロデューサー」の働きができた。それにより、はじめて取り組む団体をはじめ、継続して取り組んでいる団体にとっても頼りになる存在になれた。

補助金により、主催者が負担する通常経費の一部を軽減することができ、年々負担が増す1公演あたりの経費を抑えることができた。

「アートマネジメント」という概念を認めてもらい、作品の下見、出演者との打ち合わせ等、必要経費を確保できたことで、より良い作品選び、実施にあたっての細かな確認など、あらゆる場面でマネジメント能力を発揮しやすくなった。

●問題点

紹介事業は、主催者の要望に合わせて招聘するアーティストの団体数、日程が順次決まってくるので、年度始めに提出する計画書の通りにならない。

現状では継続実施する団体が多いため、新たな実施団体を増やし、より多くの子どもたちの体験機会を確保する必要がある。また、主催者には、県の補助事業であることが伝わりにくい。

以上のことを踏まえ、現在実施されている「アートスタート支援事業」に関する補助金制度を見直し、更に必要とされる新規事業を加えた「新アートスタート支援事業」へと発展させるべき時が来たと私たちは考えています。できるならば、鳥取県の事業としての明確な位置付けをし、新たなスタイルの子育て支援事業として取り組んでいくことが望まれます。

つまり、改善すべきことをまとめると、次のようになります。

- 1「アートスタート」運動の確立
- 2年令に合わせた「アートスタート」事業の実施
- 3子どもの成長発達に添い、発展させながら継続実施できる体制づくり
- 4事業実施は、体験を貯え、専門性を有した団体が行なうこと
- 5「アートスタート」の基本は専門家(プロ)による表現活動であること
- 6「アートスタート」を新たな子育て支援として、全ての乳幼児と保護者が体験できる仕組みづくり

4. 政策の概要及び目的

成果及び問題点から導きだした改善策を念頭に、従来の「アートスタート支援事業補助金」の制度を見直し発展させたものが(1)及び(2)の事業です。そして、新たに「アートスタート運動」の確立・充実を全国発信しようとする新規事業を(3)として設けます。これらは、委託事業として実施することが最善策だと考えます。

(1) アートスタート体験・創造支援事業、 (発展事業)

- ①「アートスタート0・1・2・3体験支援事業」
- ②「アートスタートキッズ体験支援事業」
- ③「アートスタート創造支援事業」

(2) アートスタート応援事業 (発展事業)

(3) とっどりの“アートスタート”発信事業 (新規提案)

(1) アートスタート体験・創造支援事業

従来の支援モデル事業を年齢別とし、年齢に合わせた先駆的で質の高いプロの作品を県内各地の小会場で実施する。更に、県内アーティストによる子どものための作品づくりを支援する「創造支援事業」を設け、表現活動者の育成、レベルアップを図る。

①「アートスタート0・1・2・3体験支援事業」

0・1・2・3才児と保護者を対象とした鑑賞事業を県内全域の小さな会場で実施する。ほんものに触れる機会の少ない地域にも参加できる機会をつくり、五感が形成される基礎の時期を過ぎる乳幼児の「心とからだ」を刺激し、親子のふれあい、心の絆の形成を助けることを目的とする。幼い子どもへの良い影響だけでなく、子どもとどう接して良いかが分からない若い両親への子育て支援ともなる。

県内各地で6会場、6公演程度を実施する。

②「アートスタートキッズ体験支援事業」

4才～小学生の子どもを対象とした鑑賞事業を県内全域の小さな会場で実施する。芝居や音楽、さまざまなジャンルの小さな生の舞台に触れる機会をつくることで、文化に芸術に親しむ土壌ができる。ホールのない地域、身近な場所での「ホンモノ体験」が、将来の文化鑑賞者育成、ひいては文化実践者の裾野を広げることにつながる。

県内各地で6会場、6公演程度を実施する。

③「アートスタート創造支援事業」

子ども(0才～小学生)のための県内文化活動者の新たな作品づくり、研究・実践の支援を行なう。表現活動実践者の人材育成、スキルアップを図り、県内の子どもたちがより身近なところで文化芸術に触れる機会をつくることにつながる。

県内3会場(東・中・西部)で各1公演実施する。

(2) アートスタート応援事業

県内の幼稚園・保育園・地区公民館、地域の小グループなどが子ども(0才～小学生)のためのプロのアーティストを招聘しようとする時、必要経費の一部(全体経費の1～2割)を補助する。従来の紹介事業では、紹介元へ全体経費の一部が補助(アートマネジメント料として)されていたが、公演を主催する団体が直接補助申請を行なうように仕組みを見直そうというもの。県内の子どもたちが「仲間とともに生の舞台に触れる」機会を保障し、質の高い作品を効率良く(経費面)実施するとともに、これらの事業に取り組む団体を応援する姿勢を示すことにより、持続可能な事業とすることを目指す。

県内各地で年間30ヶ所程度を財政支援する。

(3) とっどりの“アートスタート”発信事業

全国規模のフォーラム「アートスタートフォーラム in とっどり」(仮称)の開催

「アートスタート」の実践を支える我が県の取り組みは、全国でも例を見ない。「アートスタート先進県」の証だと言える。0・1・2・3才を対象とした県内各地での「アートスタートとっどりモデル」普及の成果をまとめ、全国に向け発信するために全国規模のフォーラムを開催する。このフォーラムは、子育て支援、子どもの文化育成、という異なる分野が協同実施し、国内外の子どものための優れた舞台作品の紹介とともに、乳幼児に対する「アートスタート」の限りない可能性を実感できる全国初の試みとなる。フォーラム開催を通じ、「文化と子育てに優しい鳥取県」を全国にアピールするとともに、「アートスタート」を新しい時代の「子育て支援モデル」として世の中に伝え広めることができる。また、「文化」、「子育て」の分野で活躍する人をつなぎ、県内の子ども文化関係者のネットワーク構築を押し進めることも期待できる。

5. 政策の実施方法及び実施にあたっての連携について

1. アートスタート体験・創造支援事業、 → 県内活動団体へ委託

①～③までは実施団体を公募の上、委託する。ただし、①、②に関しては県内全域でプロ公演を複数開催行える団体であること。子どものためのプロによる舞台芸術活動のプロデュース能力を有する人材が確保されていること。等、県民(参加者)の視点での応募条件(質の確保)を整備する必要がある。更に、開催地域の子育て支援に関わる組織、団体との連携をはかりながら実施すること。③に関しては、県内活動者、プロ、アマを問わない。

- ①「アートスタート0・1・2・3体験支援事業」
- ②「アートスタートキッズ体験支援事業」
- ③「アートスタート創造支援事業」

2. アートスタート紹介事業 → 県内主催団体申請方式

子どものためのプロ公演開催に際し、かかる経費の一部を主催者の申請により助成する。(経費の1割? 2割を助成金額とし、幼稚園・保育所・地区公民館など参加者100名以内を対象とする小作品についてのみ助成する。)

3. とっどりの“アートスタート”発信事業 → 実行委員会方式

県内で「子ども・子育て・文化」に関わる活動をしている人、団体、文化会館関係者などを巻き込み、実行委員会を組織する。行政側からは、文化担当、子育て支援担当の職員が関わることとし、3カ年計画で鳥取発の「アートスタート事業」構築を目指す。

初年度:実行委員会の結成、「アートスタートとっとりモデル」の構築準備、

2年度:全国フォーラムプレ事業実施

3年度:全国フォーラム開催

民間の連携団体としては、全国フォーラム開催実施のため、とっとりコンベンションビューローをはじめとし、「ブックスタート」運動との連動も視野に入れ、こども読書支援関連団体、子ども文化育成団体(とっとり人形劇連絡会、県内のおやこ・こども劇場)への協力を求める。

●期待される効果

そもそも「文化」とは、人々が喜びを分かち合う様を言うのではないのでしょうか。人と人が日常の中で「喜怒哀楽」を共有する。そうした経験が豊かな感情を育むのです。「心を育てる」とは、このような体験を重ねることに他ならないと私たちは確信しています。「三つ子の魂百まで」と古くからの諺にもあるように、幼い心(魂)に刻み込まれた「喜び」は、その後の人生をより豊かなものにし、目には見えない「親子の絆」を強いものにするでしょう。0～3才という大切な時期を過す子どもと親を「文化」を通じて支援する。それを全ての対象者が享受できる社会づくりは、これから求められるであろう行政の役割です。子育てに「文化」は欠かせないものだという事を、誰もが再認識し、感性豊かな人が育つ鳥取県へと県民の意識をより一層高めるために、「アートスタート」を鳥取県独自の施策として定着させていただきたいものです。それこそが、「文化立県」にふさわしい人づくりの事業になるものと期待します。

6. 終わりに

人それぞれに多様な価値観があり、ライフスタイルも多様な現代です。情報は溢れ、誰もがそれに振り回されながら、暮らしています。そのような時代にあって、決して変わってはならないものがあるとするならば、「子どもはみんな、愛されて育つ」ということではないでしょうか。ひと昔前まで、大人の背中中の温もりを感じながら「わらべ唄」を聞いて日々を過す幸せな子どもたちが大勢いました。子どもたちの「五感」を刺激する暮らしが特別の事でなく、日常に溢れていた時代。情報も、モノも、今とは比べようもない乏しさだったでしょうが、子どもに注がれる大人の眼差し、やさしさは、今の時代の何倍もあったことでしょう。何時の頃からか、子どもを「あやす」ことさえ、途絶えさせてしまった私達は、今、敢えて、失ったものを取り戻す作業をしなければならないのだと思います。親以外の大人たちと出会う、普段耳にしたことのない「音・声・響き」を聴く、大好きな人の膝の上で、時に緊張し、時に身を乗り出し、時に微笑んで、泣いたり笑ったり驚いたり…。非日常の空間が、いつしか日常へと変化し始めたら、なくしたものを少し取り戻せた証拠かも知れません。

「アートスタート」を通じて、親子がそっと心を寄せあう時、笑顔がパッと溢れます。その笑顔を県内全てのお母さんに、お子さんに、と私達は願っています。

